

第一次世界大戦後ドイツにおける義勇軍経験の史的 分析

著者	今井 宏昌
学位授与年月日	2016-02-29
URL	http://doi.org/10.15083/00073179

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名

今井 宏昌

本論文は、従来の歴史学研究で「ナチズムの前史」に位置づけられることの多い、第一次世界大戦直後のドイツ義勇軍運動を取り上げ、これが単にナチズムなど右翼急進派だけでなく、ヴァイマル共和国を擁護する共和派、さらには親ソ的な左翼革命運動にもつながる多様な側面をもつ政治運動であったことを、綿密な史料分析に基づき実証的に明らかにするものである。分析の方法としては「経験史」のアプローチが駆使され、それが先行研究から本論文を大いに際立たせている。具体的にいえば、義勇軍運動に参加した同世代の三名の代表的な人物—アルベルト・レオ・シュラーゲター、ユリウス・レーバー、ヨーゼフ・ベッポ・レーマー—が、彼らに共通する義勇軍体験にも拘わらず、やがて互いに大きく異なる立場から相反する政治行動を展開するにいたる要因がいったいどこにあったのか、義勇軍経験に見出した意義や解釈の違いが、その後の彼らの行動にどのような影響を及ぼしたかを入念に論証している。

本論文で用いられる主な史料は、ドイツ連邦文書館（ベルリン、コーブレンツ）、バイエルン州立中央文書館（ミュンヘン）など、ドイツの公文書館所蔵の義勇軍関連文書、ナチ党文書、警察文書の他、上記三名が遺した日記、手紙、証言など膨大な数の「エゴ・ドキュメント」（自己証言文）である。

本論文は、序章と終章を含めて七つの章から成っている。

序章では、まずドイツ義勇軍運動に関する先行研究の問題点が明らかにされ、それを克服しようとする本論文の問題意識と狙いが提示される。次に「経験史」研究の鍵概念（体験・経験・期待の地平・行動）に明確な定義が与えられ、その上で従来の研究で繰り返し強調されてきた、第一次世界大戦が政治の野蛮化をもたらしたとする「野蛮化テーゼ」（ジョージ・モッセ）に見直しを迫ろうとする、本論文のもうひとつの意図が示される。

第1章「ドイツ革命期における義勇軍運動の形成と展開」では、1918年から19年にかけての義勇軍運動の形成と展開が、帝政崩壊後に成立したヴァイマル共和国政府、軍部、兵士評議会、地方行政組織、帰還兵部隊、現地住民、そして連合軍などの多様なアクターがせめぎあう過程の一部として論述される。対象地域としてはドイツ国内と、バルト海沿岸地方など「ドイツ東方」に分けて分析が行われ、とくに「ドイツ東方」で大きく展開した義勇軍運

動が、新生共和国に敵対する姿勢を露わにする経緯が明らかにされる。さらに義勇軍の社会的構成も検討され、義勇軍運動の中核的担い手が1890年代生まれの青年将校たちであったことが究明される。

第2章「裏切りの共和国：アルベルト・レオ・シュラーゲターの義勇軍経験」では、カトリック青年のシュラーゲターが、第一次世界大戦と義勇軍闘争を経てヴァイマル共和国に敵対する政治姿勢を強め、やがてナチズム運動に合流するまでの過程が分析される。ここでは第一次世界大戦の従軍経験が義勇軍への参加を促す直接的な動機ではなかったこと、そしてバルト海沿岸地域での義勇軍闘争をきっかけに政治との関与が深まり、その結果としてナチ党入党につながったことが明らかになる。

第3章「共和国の防衛：ユリウス・レーバーの義勇軍経験」では、社会民主党員のレーバーがカップー揆、すなわち1920年3月に突発した反共和派軍人・義勇兵による反政府クーデターに対して、東部国境守備という自身の義勇軍経験に基づいて厳しく反対した背景と経緯が明らかにされる。そして一揆主義者に主導された義勇兵との対決は、レーバーの中に敵の像としての新たな義勇軍観を育み、その暴力から新生共和国を防衛するという課題を意識させた。こうした多様な義勇軍体験は、やがて共和派の政治家・活動家として姿を現すレーバーの政治的原点として位置づけられる。

第4章「コミュニストとの共闘：ヨーゼフ・ベッポ・レーマーの義勇軍経験」では、バイエルン王国崩壊後のミュンヘン・レーテ共和国を粉砕した右翼青年、義勇軍指導者のレーマーが、やがて政治的に対極に位置する革命的共産主義運動と共闘関係を結ぶにいたるまでの過程が検討される。それは独ソ接近という1920年代前半の国際状況の変化によって促され、ポーランドとの国境問題をめぐる義勇軍運動、「オーバーシュレージエン闘争」で頂点を迎えた。この時に共産主義者と共闘した経験が、レーマーにおけるかつての「アカとの闘争」の経験を刷新し、独ソ提携にドイツの活路を見出すナショナル・ボルシェヴィストへの道を開いたとされる。

第5章「ルール闘争期における義勇軍経験の交差」では、本論文の主たる分析対象であるシュラーゲター、レーバー、レーマーの義勇軍経験が、ドイツの「危機の一年」と言われる1923年のルール闘争の中で、互いに異なる政治行動に帰結する様相が検討される。そこでは、シュラーゲターの死とその国民的英雄化を契機とした好戦的ナショナリズムが激化する過程、それに対するレーバーの共和派としての批判、さらに「シュラーゲター」を政治的に利用しようとする共産党路線とそれへのレーマーの協力が、それぞれ各自の義勇軍経験と密接に絡み合っていたことが明らかにされる。そして、一見類似した運動にみえる義勇軍運動とナチズム運動の間に、前者のアクティヴィズム（行動主義）と後者の政治主義という傾向の違いに起因する強い緊張関係が存在していたことが解明される。

終章では、本論文を要約した上で結論が述べられる。そこでは義勇軍経験がナチズムの台頭に端的に示される「政治の野蛮化」だけではなく、それとは正反対の、右翼暴力主義や一揆主義への対抗潮流をも生み出していた点が経験史の観点から析出され、それらがやがて

様々な政治陣営で反ヒトラー・反ナチ抵抗運動への回路を生み出したと評価している。

本論文の学術的な意義は次の三点にまとめられる。

第一に、ドイツ現代史における義勇軍研究への貢献である。義勇軍を「ナチズムの前衛」とする見方はいまま歴史学界内で優勢だが、本論文は義勇軍経験を同時代の歴史的な文脈の中で分析し、それが政治的に分極化していく過程を丁寧に跡づけることで、義勇軍をドイツ現代史のより幅広い文脈の中に捉え直すことに成功している。

第二に、第一次世界大戦後ドイツにおける「政治の野蛮化」をめぐる議論を、その当事者とされる義勇軍戦士の政治的多様性を踏まえながら捉え直し、その修正をはかった点である。とくに義勇軍経験の中で「野蛮化」と同時にそれを押しとどめようとする動きが同時に起きていたとの指摘は、戦間期ドイツ史のイメージを大きく塗り替えるものである。

第三に、「経験史研究」への貢献である。これまで、経験史研究には、歴史主体（人間）の内面に注目する余り、人間をとりまく社会構造の問題を軽視しているとの批判が向けられてきた。これに対して本論文は、人間の具体的な行為に注目し、そこに人間の内面と社会構造との交点（結節点）を見出し、それが政治的影響のもとで移りゆく様子を、豊富な史料分析に基づいて明らかにすることに成功している。

そのように、大変優れた論文だが、問題点がないわけではない。例えば、なぜ対象人物がシュラーゲター、レーバー、レーマーの三者に限られるのか、彼らが義勇軍運動全体をどの程度代表しているのか、という問いが積極的に議論されていない点。また分析対象時期を義勇軍運動がおおむね終局を迎える 1923 年秋までとしているため、その後のヴァイマル共和国期を通して、彼らの義勇軍経験がどのような形で急進右翼陣営に絡め取られたのか、あるいはそこから離れて反ヒトラー・反ナチズムへ向かったのか、義勇軍運動総体の歴史的評価に関わる論点が十分には深められていない点が、欠点として指摘できよう。

しかしこれらの不足は、いずれも本論文提出者が今後の研究のなかで取り組むべき課題を示唆するもので、本論文の高い学術的な水準と価値といささかも損なうものではない。それゆえ、本審査委員会は本論文が博士(学術)の学位を授与するに相応しいものと認定する。